

中近世西アジアにおける史的テキストの参照・改変・転用とその主体・受容者についての
国際的・学際的研究 (jrp000301)

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

The contents of this report are the intellectual property of their respective authors. Please do not circulate or cite without authors' permission.

--

イベント名：2024 年度第 4 回研究会/“The Libraries and Archival Practices in the Early Modern Eastern Islamic World”

日時：2025 年 3 月 20 日（木・祝日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室（303）

公開の範囲：公開（事前登録制）

開催方式：対面・オンライン併用

参加人数：対面 18 名、オンライン 19 名／外国人 17 名、共同研究員 9 名、所員 8 名（重複含む）

使用言語：英語・ペルシア語（通訳なし）

プログラム・要旨：別紙参照

内容：

3 月 20 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室にて、「中近世西アジアにおける史的テキストの参照・改変・転用とその主体・受容者についての国際的・学際的研究」2024 年度第 4 回研究会/“The Libraries and Archival Practices in the Early Modern Eastern Islamic World”が開催された。

本会議は、研究代表者神田惟（AA 研）と研究副代表者 Philip Bockholt（University of Münster）、共同研究員の森本一夫（東京大学東洋文化研究所/アジア研究図書館）によって企画され、本共共課題・基幹研究『『記憶』のフィールド・アーカイビング：イスラームがつなぐ共生社会の動態の解明』・東京大学アジア研究図書館が主催し、Association for the Study of Persianate Societies 日本事務所・東京大学東洋文化研究所班研究「ペルシア語文化圏研究」が協賛する形で開催された。

図書館の形成と書物管理の実践は、20 世紀初頭以前のイスラーム地域における知的・文化的・宗教的環境の構築において、重要な役割を果たしてきた。2000 年代以降、イスラーム史研究においては、写本や財産目録といった「マテリアル」に注目した書物文化の研究が活発になり、特にアラブ史やオスマン史の分野では顕著な研究成果が蓄積されている。しかし、イランやインドをはじめとするペルシア語文化圏の図書館や書物文化に関する研究は、依然として十分に進んでいないのが現状である。写本や財産目録の「マテリアリティ」や、蔵書所有者・寄進者に注目しつつ、「中近世西アジアにおける史的テキストの参照・改変・転用」とそのエージェンシーを探究することが、本会議の主要な目的である。

「The Libraries and Archival Practices in the Early Modern Eastern Islamic World」と題された本会議では、日本、ドイツ、イラン、英国に拠点を置く研究者により、近世東方イスラーム

ム世界（主にイランおよびインド）を対象として、写本の来歴、蔵書所有者の身分やネットワーク、書物の寄進、蔵書目録の編纂、保存・管理、さらには寄進財の運用に関する最新かつ先端的な知見が提示された。これらの検討を通じて、イランおよびインドにおける図書館と書物文化の社会的・知的・宗教的側面への理解が一層深まり、同時に、関連テーマにおける比較研究にとっても重要な示唆を与える成果が得られた。

本会議には 70 名を超える登録があり、本テーマに対する関心の高さがうかがえる。実際の参加者は、共同研究員 9 名を含む計 37 名であり、ペルシア語および英語による高度な専門的議論が展開された。本会議の開催を通じて、AA 研をはじめとする日本の研究機関が、西アジア史・南アジア史研究における国際的な研究拠点となり得る可能性を十分に示すことができたと自負している。

本会議、および 2025 年度に NIHU グローバル地中海地域プロジェクト AA 研拠点で開催された/開催見込みの報告の成果については、査読付きの英語論集として、2027 年春に刊行することを目指している。神田は、当該論集のプロポーザルを執筆し、Bockholt と連名で 2025 年 5 月初旬にある査読誌に提出した。

（文責：神田 惟）



▲会議当日の大会議室の様子